

G-3 住居と住まい

791. 住居の意味

熱帯の住居の役割は就寝場所である。例えばカンブン(→728)では寝る以外の機能である食事、洗面、^{だんらん}団欒などの場は皆、屋外にあるといえる。大勢の人が集まって深夜まで賑やかにしているが、眠くなると適当な場所を陣取って寝る。家の中に場所がなければ軒下で寝る。夜中に冷えや雨を防ぐために単に寝る場所として家屋の内が望ましいが、なくてもそれほど困らない。アナック・ジャラナン(anak jalanan)の訳は「通りの子供」であり、字義どおりストリート・チルドレンのインドネシア語訳である。

竹やアンペラの壁の農家はみずばらしいが、通気性はよい。家と家の間隔は十分に保たれており、熱帯の気候に対応したものである。都会の密集したカンブンのスラム状の住居様式はインドネシア在来の様式ではなく中国人が持ち込んだショップ・ハウス(後述 798)の影響を受けたものでなかろうか。

家の建材は木、竹、ヤシの葉などの植物でたたきつけるように降るスコールに耐えねばならない。白蟻はコンクリートでさえ噛み砕く。熱帯で家は固定資産でなく耐久消費財である。家は人と同じように死生を伴う消耗品である。

日本でも家とは単なる住居のことではなく、家族の象徴となる城ともいうべき建造物であり、歴代の家族の累積の総称であった。インドネシアの家族にはわけのわからない親族が入り込み結合の関係が緩やかであるのは住居の性格に起因するかもしれない。

しかし一方では住宅を寝起きの生活の場所以上のものとする民族もいる。家も人体に対応するものと見なされているので柱の太さとか間隔など建造した主人の人体のどれかの数値に対応している。バリ島では世帯主の男性であるが、隣のロンボック島のササク族(→213)は世帯主の妻の身体の数値が採用される。住居のヌシは妻だからである。

住居を人体と見たて住居の各部分を人体に例える。柱の中で主要なものを臍柱という。フロレス島の民族は住居を子宮と見なす。入口は膣である。バタック人の伝統住居では入口の上の左右に生々しい乳房の装飾がある。家屋構造自体が女体を表している。切妻の入口を産道とし家の中を子宮とみなす。入口の乳房は一族への豊穰祈願の象徴である。

フロレス島の民家の入口にも乳房の装飾が使用されている。ちなみに住居である家屋を子宮とみなす発想は人類に普遍的なものであり、東インドネシア以外にもある。例えば英語でも room(家)、womb(子宮)、tomb(墓)の言葉の相関性が指摘されている。

トラジャ人のトンコナン住宅(→940)では水牛の角を玄関に積み上げ、住居を水牛に見たてた。カロ族(→607)の住居の切妻には鬼瓦の位置に水牛の頭がある。

家はまた敵襲に備える要塞である。首狩民族の住居は高床式である。ニューギニア島には樹上に家を築くコロワイ族¹もいる。

¹コロワイ(Korowai)族は西南部の低地地帯で比較的最近発見された部族である。樹上住居が TV で紹介されたが、文化的にはアスマット族との共通性が見られる。何れ観光スポットに組み入れられるだろう。

792. 高床式住宅

東南アジア一般の住居の形態は高床式といわれるように居住部分は地表面より高くなっている。玄関には階段がたてかけてある。ドンソン文化(→011)として知られる青銅器の銅鼓に描かれた家屋は高床式である。高床式住居は東南アジアの基層文化である。

日本の住居も東南アジアの高床式の名残で、わずかに高くなっている半高床式(中床式)である。縄文・弥生の頃の住居跡遺跡の復元を見ると直接地面と接した生活であった。それが何かの事情で土間式から高床式に代わる。伊勢神宮や出雲大社などに見られる高床式の日本の神社様式は東南アジアの高床式住居に通じる。日本人ルーツの南方説の有力な根拠である。

一方、東南アジア大陸部では土間式が一般的であり高床式は一部残存しているにすぎない。中国の影響であろう。

高床式住宅はジャワ島、バリ島以外のオーストロネシア系(マレー系)民族(→563)の共通の文化となっている。ボロブドール遺跡(→126)に刻まれた住宅は高床式であり、ジャワ島とバリ島も始めは高床式であったものが後に土間式に変わっていったらしい。

ジャワ人住宅の土間式への変更は中国文化の影響説もある。ヒンドゥー教の影響でヒンドゥー教は大地との直接の接触を好む南インドとの共通性もいわれる。高床式がヒンドゥー思想としてイスラムに排除されたとの説もあり、本当の理由は分からない。人口密度が高くなると土間式の方が住居面積と建築用材木の節約になるのでなかろうか。

各民族の米などの倉(日本の正倉院を含む)は高床であることから、高床式住宅と稲作はセットと考えやすいが、稲作と高床式の組み合わせの必然性はない。

高床式は次のような理由で東南アジアのモンスーン風土に適応した住居である。

- 湿潤な気候において床下の通風をよくする、
- 害獣や害虫の防止になる、
- 洪水からの安全性を確保できる、

高床式の利点は階段を引き上げれば砦とりでのようになり不審者の侵入を防げる。ベッドを使用するのは就寝中に敵に床下から槍で突かることの防止策であろう。

映画か TV で人手を集めて家そのものを大きな神輿みこしのように担いで引越するシーンがあった。家は不動産というのは通念に基づく固定概念らしい。

地面から床までの高さは地域によって差があり、人が立って歩ける程度の低いものから 5m もある。床下は農作業の道具の物置に使用される。鶏小屋や牛や豚の家畜小屋になっている場合もある。ブルネイのように所得が豊かになると自家用車の車庫となる。

インドネシア各地には伝統に基づく民家様式を伝えている。バタック人のそり屋根住宅(→939)、ミナンカバウのルマガダン(→938)、トラジャ人のトンコナン(→940)、ニアス人の船型住宅(→920)などの特徴のある民家は全て高床式であり、芸術品といえるものである。

⇒937. 伝来の伝統家屋

793. 杭上住宅

川ぞいでは家は岸側でなく川側に杭を打ちその上に建てる。母屋が陸の場合も便所とか浴室の部分だけは水上に突き出すという形式もある。沼地でも同じである。海でも風下の島影の波静かな入江に密集している。この住居群を「カンブン・アイル(kampung air=水上集落)」という。家と家は板の棧橋で結ばれて陸に繋がっているが、多くは自家用の小船を杭に係留している。

カリマンタン島の南シナ海側にあるブルネイ(→186)というマレー系の国は石油・ガスで大層裕福な国であるにもかかわらず、多くの人が海上の家に住んでいる。1521年にマゼラン艦隊が訪れた時にブルネイのカンブン・アイルの光景を記録しているが、外観の記載はそのまま現状に通じる。マレー系住民の水上住宅への志向は所得と関係ない。ちなみにブルネイの唯一の観光資源はカンブン・アイルである。

ブルネイ政府は陸上に公営住宅を建設して陸に移るように奨励しているが、国民の大半は依然として水上の高床式住宅を好んでいる。電線、電話線も張り巡らしてあるので近代風の生活をしており、中には虎皮の敷物がある家もある。

どうもマレー系民族の家屋は乾いた地面を避けて湿気の多い所をわざと求めているようである。この理由として彼らはマンディ(→803)が好きで水辺に住みたがるという説もある。河にしる海にしる家の正面は水側である。

ムシ河(→101)河口のデルタ地帯に「スンサン(Sungsang)」という杭上住宅が密集し都市の形態をなしている所がある。板張りの歩道の両側に商店が延々と続き、水辺の機動性からシンガポールとの交易が盛んであり、公然の密輸の基地という。

海上とか川面のように水の動くところではゴミは床下に捨てれば自動的に清掃されるが、不法占拠と見られるみすぼらしい家が込み合っている所では床下の湿地のごみが漂う汚い水たまりからメタンガスが発生している。

インドネシアの諺に「波をかぶるのが怖ければ水辺に家を持つな」というのがある。裏返せば「波を恐れずに水辺に家を持って」ということである。

漂海民のバジャウ族(→662)も“家船”から政府の定住化政策に従って海辺に船を定着するようになり、杭上住宅に居住するようになった。マレー人とバジャウ人の水上住宅が群れをなしている所がある。両者の間には境界がある。外来者には分らないが、当事者同士はよく弁えて決して相手の領分に踏み込もうとしないそうだ。



インドネシア写真集の光景で遠浅の海の彼方の海中の杭上に一軒家が建っている写真が印象的であった。多分、単独生活に慣れたバジャウ族の船住宅が定着化したものであろう。海賊の多い海であるから逃げも隠れもできない海の一軒家では襲われないかと危ぶまれるが、心配はない。何故なら家のある場所は礁湖というサンゴ礁のある浅い海であるのでバジャウ族の使用する喫水の浅い平底の船でないと近づけないからである。

794. ジャワ人の住居

マレー系(→563)民族においては高床式住宅(前々項)が共通の文化になっているが、その中でジャワ島とバリ島、ロンボック島の民家だけは例外的に土間式である。ジャワ島でもスダ地域は高床式である。ボロブドール遺跡(→126)に描かれた住居は高床式であり、ジャワも元は高床式であったらしい。大陸部を含めた東南アジア全体に高床式である。ジャワ人の住居だけが土間式に変更になった理由は解明されていない。

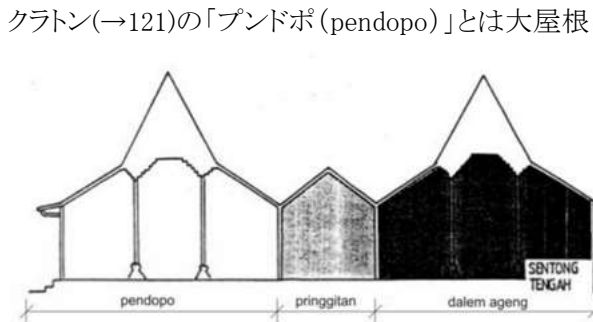
ジャワ人は土間式が文化的であると確信しているので移住先でも土間式にこだわる。スマトラ島やカリマンタン島で水田と土間式の住宅があればジャワ人の移住村であることの証である。

ジャワ風の伝統家屋は屋根の中央が急勾配の寄棟屋根が一段と高くなっている。この帽子風の屋根は「ジョグロ(joglo)屋根」といわれメール山(→699)を象徴している。ジョグロ屋根の家は有力者の証明であり、格のある家ほど屋根は高い。スラムタン(→705)のようなお祝いの際にも御飯を盛り上げるのは山岳信仰の名残である。内部のピラミッド状の木組はヒンドゥー教のチャンディ建築に由来している。

ジョグロ屋根のある奥の部屋が家の最重要な部屋である。床の間ともいうべき場所は床が高くなり装飾付きのベッドが置かれる。稲の女神スリ(→698)あるいはロロキドゥル(→949)の就寝場所であるので、普段はカーテンで囲ってあり結婚式などの儀式の時だけ開ける。部屋の左右の戸棚に食料や道具が保管される。



ジョグロ屋根



クラトン(→121)の「プンドポ(pendopo)」とは大屋根に大理石の床の三方吹き抜けの広間からなり、王宮の行事が行われるクラトンの最も重要な建物である。プンドポは民家にも取り入れられ応接に使用される。玄関に接するベランダ部分で三方が吹き抜けである。プンドポと奥の部屋をつなぐ空間にプリングタン(peringgitan)というスペースがある。プンドポで演じられるワヤン(→904)を見る場所である。

ジャワではジョグロ屋根がバス停やキオスクにもデザインとして装飾的に使用されている。人の集まる公共施設にプンドポ様式が導入されている。ジョグロ屋根とプンドポ様式はジャワ建築のシンボルである。

しかるべき建物は居住棟の東側と西側で用途が異なる。東側は家族や客などの共用であるが、西側は女性の領域である。居住棟の部屋は寝室だけであり、寝る以外の厨房は井戸や浴室とともに後方の別棟がおかれる。上流階級の伝統家屋にはクラトンに習いジャワ人のコスモロジーが表わされている。



リマサン様式の住宅

庶民の住居はもっと簡単な寄せ棟形式である。梁が二重になった「リマサン(Limasan)様式」といわれる。家の構造は10m×6m程度の一部屋しかなく、竹で編んだビリック(bilik)という衝立で応接間、居間、物置に仕切られている。畳2畳分の木の台があって食事や団欒の場である。夜は寝室になるので土間に直接寝るわけではない。

795. バリ人の住居

道路に沿うバリ人の家の土塀は金沢や萩の城下町で見る土族の住居の土塀を思わせる。北京の胡同の古民家と似ているようで異なるのは土塀の高さである。中国では人間の侵略を防ぐため土塀の拒絶の表情は厳しいが、バリでは脚立があれば容易に乗り越えられる程度の高さである。

バリ人の信じるところによれば、「ブタカラ (butakala)」という悪霊は地面に近い所を徘徊しているから土塀はその侵略を防ぐためのものであり、相手は人間でない。京都御所の塀は結界の印であって戦術上の防御のためのものでないのと同じ思想であろう。

バリ建築では門が階段になっているのは階段が苦手な悪霊除けである。入口には祠ほこらがあって石造の守護神が悪霊の侵入を見張っている。元魔王の係累を守護神にするのは悪をもって悪を制するという考え方である。ジャワにおいてもクラトン(→121)やチャンディ(→146)ではラクササ(→945)が“仁王”の役目である。

小さくて狭い門はバリ独特のブック・スタンドのような切り口になっている。これは魔物の進入を防ぐための様式で故意に狭くしてある。さらに門に入ってすぐに「アリン・アリン (aling-aling)」という衝立のような壁に遮られる。これは悪霊が家の中を見通せないようにする障害物であり、また悪霊は曲がるのが不得手であるのでそのための仕掛けである。中国にも同様の建築物があるそうだ。

バリでは家屋が落成の際には「ムラスパス (melaspas)」という浄化儀式が行われる。地霊その他への供犠なしに居住すれば不幸が訪れるからである。



バリ人の住居の特徴はどの家も屋敷中の配置が共通であることである。家の中の配置は聖なるカジャの方角(→643)、即ちアグン山の方角、しかも聖である東側にその家の「サンガー (sanggar)」という社²がある。反対側の穢れたクロッドの方角に便所や台所 = パオン (paon)、倉庫 = ルンブン (umbung)がおかれる。



サンガー

バリ農民の伝統屋敷は一つの区画の敷地の中に数世代が同居する、兄弟が各々の世帯を持つこともある。この場合、居住する建物も台所も原則として別である。住居部分は相撲の土俵のように地面から高くなった土間式である。熱帯モンス

ーン気候であるから建物は雨を防ぐための天井と柱だけの構造である。建物の壁は二面程度であとは開放されている。



ウマムテン

方角のいい所にあるウマムテン (umahmeten) という母屋は主人夫婦の寝所である。主人夫婦の寝所は4面とも壁に囲まれているので新婚夫婦のため新婚期間だけ明け渡されることがある。「バレ (bale)」という壁のない東屋風の建物は一族共同の応接室である。

バリの観光コースにこのような家の見学コースがあるように伝統様

²サンガーはトウングン・カラ (tunggunkarang)ともいわれる。

式の屋敷は少なくなりつつあるのであろう。自動車道路沿いに見える都会近郊の家はガラスやサッシが使用されており伝統様式は次第に減じつつあるようだ。

⇒942.プリンプラン村

796. コロニアル風邸宅

ジャカルタのメンテン地区にはオランダ人が植民地支配時代に建てた西欧の素材やデザインによるコロニアル風設計の邸宅が残っている。建物は1区画300~400㎡の面積があり、広い庭には日陰のための木が植えられた。これらの住宅は風通しをよくするためという理由で平屋であるが、実は地震を恐れたからともいわれる。ちなみにオランダに地震はないのでジャワ島で始めて体験する恐怖であった。

熱帯の気候風土は故国オランダとあまりにも異なる。コロニアル風といわれる邸宅の設計はヨーロッパ風であるが、ギリシア・ローマ様式が取り入れられたものである。設計者にはポンペイの発掘で明らかになったローマ人の別荘が頭にあったであろう。柱に贅をこらした。調度品は世界各地から集めた贅をこらしたものである。ジャワ風のジョゴロ屋根(前々述)を取り入れたものもある。ヨーロッパ諸国が植民地の気候風土に現地適用した住宅設計を総じてコロニアル建築という。

ジャワ・コロニアル風の特徴は広いベランダである。ベランダの続きが屋内のホールになる。夕方になると人はベランダで時間を過ごした。人を招いてダンスをする、ビールを飲む、カードをする、雑談する、これが彼らの娯楽であり生活であった。

物置、厩、召使の居住部屋も別棟にある。浴室、炊事場でさえ別棟である。料理は出来たての熱いものは要らないので屋外の炊事場から召使が運んでくる。大勢の召使いを駆使し、本国では考えられない生活を楽しんだ。例えば食事前だけでも3人の召使いが仕えた。一人は手洗いの水を持ち、二人目は手洗いの皿を持ち、三人目は手ふきのタオルを持っていた。食事になると料理毎の担当の召使いがゾロゾロ並んで給仕した。

これらのオランダ人の邸宅には今では政府高官や外国企業の幹部が居住している。多分、建て替えられているであろう。ヨーロッパ風の建物はインドネシアでは気候の厳しさのため早く消耗するからである。公機関によって保存されている独立宣言起草文記念館は日本占領中、前田海軍武官(→355)の邸として使用された。

オランダ人が持ち込んだ赤茶色のスレート屋根瓦は、一見、ヨーロッパの中世の町並みと同じである。しかし日本の瓦に比べても薄い瓦では、たたきつけるようなスコールに耐え切れず、一戸建ては絶えず雨漏りに悩まされる。

たまたま訪れたオランダ時代の建物は天井が高く、後から追加した冷房設備の効果がないうであった。窓は分厚いカーテンに隠れ、部屋は暗かった。明るい太陽の光がさんさんと差し込むのは熱帯ではマイナスイメージであって太陽の光を遮る暗い穴蔵のような部屋が好まれたのであろう。

最近ではアメリカナイズされた建物と部屋が世界を席捲している。インドネシアもその例外ではなく天井は低くなり、大きなガラス窓のある高級マンション(→889)が流行するようになった。冷房装置の存在を前提にした建物は電気がなくなればさぞ住み心地は悪かろう。

⇒161.メンテン地区

797. プルムナス住宅

インドネシアの大都市の住宅事情の悪さは相当なものである。『追いつ追われつ』という若い男女の恋愛インドネシア映画でも住宅事情の悪さがバックにある。結婚への支障が住宅であり、結婚の破局もつまるところは狭い住居に起因するフラストレーションである。日本の昭和 30 年代といったところであろうか。

当局は住宅政策として“プルムナス住宅”の提供を行ってきた。「プルムナス (Perumnas=Perumahan Nasional=国家住宅公団)」が国の資金でもって住宅の建設を行うものである。1979 年からクバヨラン・バルに公務員住宅の建設が始まり、今日では都市郊外に規格の住宅を建設しており、その受益者は中産階級である。

田原直樹著『王宮都市の都市化・近代化』に記されているジョグジャのニュータウンの例では都市郊外に整然とした街の区割りに2戸1建物が規則的に配置される。学校とモスクのスペースが確保されている。総数 1200 戸、一戸あたりの敷地面積は 96 m²、床面積は 36 m²である。

日本の住宅と比較するとプルムナス住宅は敷地の割に床面積が少ないのは熱帯気候の下での生活は室内より庭の広いことに住居の選好ウエイトが高いのであろう。インドネシア映画を見ていると庶民の生活パターンは寝る時だけは屋内であるが、通常は屋外に居て玄関先のポーチやベランダが居間のように使用されている。

「ルマ・ススン (Rumah Susun 略してルスン rusun=中層住宅)」は積み重なった家という意味である。プルムナス住宅にも日本の住宅公団がサンプルを建て公団アパート型の4階建てのフラットが 1970 年代から建設されるようになった。

カンブン再開発プロジェクト(→755)においても住宅の高層化が進められたが、以前からの住民はルスンを逃げ出し新住民が入居している。ルスンが住みにくいというよりは住居費のコストアップであろう。

さらに高層の集合住宅は都心一等地のコンドミニウム(→889)といわれ外国人や富裕階級が居住している。空調完備、セキュリティが売り物である。

政府のみならず民間の大手ディベロッパーによって住宅開発が営利事業として進められている。ジャカルタ郊外は大小の住宅開発によって市域を超えジャボタベック(→169)に拡大している。典型的ニュータウンとしてタンゲラン県カラワチ (Karawachi) の例では、ディベロッパーはリッポー(→524)である。場所は高速道路の料金出口に近いところである。鉄道などの大量輸送交通機関が未発達のみであるから高速道路依存の立地である。

500ha の開発地域には高層オフィスビル、大型ショッピングセンターを核として周りに住宅地を配置し、ゴルフ場、大学をも備える。

住宅の買手は新興の中産階級であるが、低所得者向けの住宅も併せて設置することが開発許可の条件になっているらしい。

798. ショップ・ハウス

チャイナタウンにある昔ながらの古い建物は「ショップ・ハウス (shophouse)」といわれる、一階が店舗、二階

が住居という店住兼用の構造の長屋であり、東南アジアの都会で商業を営む華僑の住居として様式化している。

都市住居であり街路の地割りに影響される。間口が狭く奥行きが深い。一階が店、二階が住居で頑丈そうな間口のせまい家が櫛の目のように軒を並べている。店舗の中ほどには二階への居住部分へ通じる階段がある。二階も個室に区切られている。店主のみならず住み込みの従業員の部屋もある。仮に何らかの余分のスペースがあるならばそこにベッドをおいて下宿人に貸す。

チャイナタウンにある高層ホテルの窓からショップ・ハウスを見下ろすと赤黒い屋根瓦が櫛比^{くしび}している。反対側の街路からのショップ・ハウスと背中あわせになり家の奥にも寸分の余裕スペースはない。

通気があるのは歩道の上の道路に面した窓だけであり、これでは家の奥への通気も不自由であろう。熱帯の蒸し暑い気候の中で居住環境は悪い。とにかく狭い場所にひしめきあって住んできた華僑のたくましさ^{たくましさ}に感嘆するのみである。

インドネシアでは漢字の看板がなくても3~4階建てのビルの合間に見られるショップ・ハウスの存在はこの地域がチャイナ・タウンであることを示している。

中には鉄筋コンクリートの建物に建て替えられたものもある。1階は従前のように店舗の前に歩道は確保されている。2階はオフィス、3・4階は居住部分³のようである。周りより高い分だけ風通しはよさそうである。

英国の支配したマレーシアやシンガポールでは一階の店舗の前面の軒下は歩行者用通路となり、二階の部分が通路にはみ出している。これは植民地当局の命により、当初は5フィートを歩行者用通路として提供することが義務づけられたものである。日本の新潟県の深雪地帯にある“雁木^{がんぎ}”の通路と同じであるが、こちらの熱帯では直射日光とスコールを避けるためである。英語では「five-feetway」ともいわれ、中国語では5脚基⁴、マレー語では「カキリマ(kaki lima=5 フィートの意)」である。

5フィート(=1.5m)はその後2¹/₂程度に拡大されたが、歩道の呼称は以前どおりカキリマが踏襲された。歩道に少しの空間があればそこには露天商が品物を掲げている。日本の祭りの神社の境内の中の人込みの混雑を思い出すが、チャイナタウンでは日常の風景である。人々は人と物の間をくぐり抜けるように通る。

太平洋戦争前に南方に進出した日本人の小売店主が大企業に対し卑下して使用したカキリマ族(→348)という言葉はチャイナタウンの狭い通路の露天営業に語源があるようだ。ちなみにインドネシア語のカキリマは小店主が転意して屋台(→858)の意味に使用されている。

⇒674.チャイナ・タウン

799. カンプンの小屋

インドネシアの大都会にはカンプンというスラム化した住宅密集地域がある、というよりはカンプンの隙間に

³1階が店舗で2階が住宅という店舗付き住宅はルコ(ruko)といわれる。住宅(rumah)、店舗(toko)のシンカタン造語で華人の店とは限らない。鉄筋コンクリートのショップ・ハウスでは屋上が非常時の物見台であり、隣家に通じる非常通路があるらしい。

⁴五脚基の建築様式の起源は中国華南地方であり、中国では「亭仔脚」また「騎楼」といわれる。台湾では商店街の建築は五脚基が義務付けられている。

ビルなどの都会らしきものがあるのがインドネシアの都市である。ジャカルタでは高層ビル直下のカンプンは市街地改造プロジェクトによって急速に減りつつあるが、カンプンは分散化しただけで解消したわけではない。

高いビルの窓から見ると足下に「ポンドック (pondok)」という掘立て小屋がギッシリと並んでいる。臭いも音も遮断された小屋の詰め具合の光景は“蜂の巣”を見るような前衛芸術の趣さえある。かつて日本の高度成長期前の頃、南海電車の高架からみた“釜ヶ崎”の風景を思い出すものがある。

ポンドックの語源は高名のイスラムの師の教えを受けるために遠くからやってきた弟子は近くに小屋を立てて住み込んだ。その小屋がポンドックであり、“隠者の庵”が本来の語義である。ちなみに固有名詞としての「ポンドック・インダー Pondok Indah = 美しい小屋の意」は日本の芦屋、田園調布に相当するジャカルタ有数の高級住宅地である。

一軒のポンドックの広さはせいぜい 6~10 m²程度の一室だけである。部屋は寝るだけの面積しかない。「起きて半畳、寝て1畳の広さ」は鴨長明の『方丈記』に記されている隠者の庵である。

隠者の隠棲するポンドックと現代都市スラムであるカンプンのポンドックの相違は周りの環境である。道に生活排水があふれて濺む。カンプンを実際に訪れた人によれば最も耐え難かったのは漂う悪臭とのことである。

公機関がカンプンに設けた数少ないサービスは水浴、便所、洗濯場をかねた MCK(後述 804)という共同水浴場である。カンプンの住人は炊事・洗面も屋外で行う。食事はワルンでするから台所は不要であり、簡単な炊事道具一式しかない。炊事道具も屋内に置く所がないから箱に入れて鍵をかけて屋外に出してある。

カンプン居住者と路上生活者と相違は寝る場所があるというだけである。一部屋からなる狭い家で一家全員が寝ている有様は蚊取り線香の渦巻き状である。家で寝る場所の順番待ちのためウロウロしている人がいるのでカンプンの深夜はザワザワしている。

農村から押し出されるようにして都会へ出てきた農民は同郷者を頼ってカンプンに住み着く。都市に仕事があるわけではない。しかし都会では定職はなくてもインフォーマル・セクター(→729)といわれるベチャ引き(→859)や露天商で何とか食べていける。昼に働く者、夜に働く者と分れて一軒のポンドックを交互に使ってフル稼働させている。

公的機関の手の行き届かないカンプンでは「タウケ (tauke)」が取り仕切っている。タウケの語源の中国語の“頭家”のごとくボスである。職業を斡旋や許認可の手続きもしてくれるが裏社会に繋がりやすい存在でもある。

⇒728.都市のカンプン、755.カンプン改良計画

800. 貴重な電気

熱帯での居住がエアコンによって革命的に改革された。植民地時代の権力者や金満家は天井の高い大部屋で天井につけた団扇うちわの組み合わせ状の物を召使いが紐で引っ張って風をおこしていた。人力扇風機と比べるとエアコンの発明は画期的である。電気の用途の最たるものはエアコンである。

炎天下の外出からアメリカ風の近代ビルに入ると砂漠でオアシスに辿り着いた感がある。エアコンの普及は結構であるが、応接室に案内されると客人には最大のもてなしとばかり寒くて鳥肌の立つ思いの冷房がサ

一ビスされる。日本からの出張者が熱帯とばかり薄着で来て、クーラーの冷え過ぎで風邪をひくことがしばしばある。

インドネシア人の寒さへの憧れがある。OL はパンストをつけ、役人やビジネス・エリートはネクタイをつけ、背広を着るのが誇りであり見栄である。オフィスでは外国人の方がだらしない格好をしている。

食料などの物価水準からみると電気代は割高で、しかも贅沢品ということで逡増制料金になっている。防犯のため外灯は夜間も点けばなしである。インドネシアで一般家庭では電気の用途は灯りと TV だけの所が多い。

ジャカルタのような都会ではネオンの光もある。日本のけばけばしさと比べるといじましい位であるが、しばらくぶりにジャカルタ駐在員が外島への長期出張から帰ってくるとネオンが示す“都会の証明”に感激するらしい。

熱帯で文明生活をするためには冷蔵庫、エアコンは必需品である。従って電気の使用量は大幅に増え、少し大きな住宅になると電気代は女中十人分の給料にも匹敵する。

電気代と人件費のバランスから電気洗濯機、電気掃除機の類の需要はインドネシアでは難しい。何故なら女中の給料と比べると電気代が高すぎる。しかし、人件費で代替のきかないテレビ、ビデオ、冷蔵庫の需要は好調である。エアコンの普及は広い一戸建ての邸宅からコンドミニアム(→889)へと居住形態も変えつつある。

インドネシアの電力供給は 50 サイクルで電圧は 220V が一般的である。従って日本で使用していた 100V 用の電気器具はトランスがないと使えない。

1980 年代の経済発展期には電力供給が追いつかず電力不足による停電が相次いだ。その後は需給の均衡を保ってきたが、2008 年には電気不足による計画停電が日常的に行われるようになった。

以前と比べると少なくなったものの事故停電が多い。特に雨期は落雷による停電を覚悟せねばならない。クーラーが切れて暑いのは我慢せねばなるまい。しかし、買いだめした冷蔵庫の食料が傷むのが駐在員夫人の悩みである。停電に備えて携帯用充電式蛍光灯が重宝される。日本と比べると電気の質がよくないので自衛手段をこじなければならぬ。パソコンなど機器には自動電圧調整器が必需品である。⁵

⇒513.電力供給業

801. 階段・玄関・床

高床式の住宅に必ず必要なものは“階段”である。ダヤク人(→624)のロングハウス(→941)では荒削りの丸太が立て掛けただけという階段をスイスイと昇降するのは年季を要する。家を留守にする際に梯子を外す習慣の所もある。マレー人の住宅ではコンクリート製の西洋風の裾拡がりの階段もある。

インドネシア語の階段(tangga)は「rumah(家)tangga(階段)」という熟語になると「家庭」とか「家事」という意味になる。「orang tetangga(直訳=階段の人)」は「隣人」という意味になる。階段には特別の思い入れがあり家のシンボルのような存在らしい。例えば日本では家のシンボルが「竈」であるような関係であろう。

ジャワの住宅は土間式であるが、履物は玄関で脱ぐようである。コロニアル・スタイルを導入した上流階級の家の床は大理石などが使われている。現実問題として屋外は暑くても屋内の石はひややかで裸足の方が

⁵ <編者註>2010 年代に入ってからジャカルタでは電圧が安定してきてオートトランスを使わなくてもよくなった。

気持ちがよい。水虫の心配もなく衛生的である。すべらないので安全でもある。しかし気をつけないと冷房のきいた部屋では石の床が冷え過ぎのため下痢の原因になる。

ジャカルタのオラン・ブサール(=orang besar 偉いさん)の邸宅でのパーティのボーイは裸足である。この場合、裸足は客人への敬意の表われとなる。ビジネス客の多いジャカルタのホテルは別としてホテルの従業員は裸足である。ジョグジャカルタのクラトン(→121)で働く人は昔ながらの服装であり裸足である。イモギリの霊廟(→123)も裸足で参拝する。モスクも裸足である。

戸外はとにかく屋内では依然として裸足であるのは日本人の夏の家と同じ情景である。この点、寝る時以外は靴と靴下を着けている西欧人とは対照的である。要するに履物は風土の産物というべき風習で、水田耕作は裸足の方が靴を履くより便利である。

水田耕作民の血を引く日本人は国際的規模の企業の社長になっても靴を脱ぎ畳に座らないとくつろげないが、靴下が気にならなくなった程度には水田耕作から遠ざかったということであろうか。

ジャカルタのオフィスを昼食時に訪れると誰も見えない、しかし人は居る様子なのでよく見るとインドネシア人だけで床にしゃがんで環になって手食(→757)で弁当を食べていた。インドネシア人が床のうえでしゃがんで食事をするのは、畳に座らないと落ちついて食事ができない、という日本人と同じある。ムシャワラ(→594)をやる際には机を片付けて車座に床に座る。

インドネシアの子供もすぐに床にしゃがんだり寝転んだりする。学校でも自由時間になると椅子から離れて床にしゃがむ。一見だらしく見えるが、気候風土の問題かもしれない。しゃがむことで床や地面が体温を吸収するのでないかと思う。子供の頃の記憶であるが、飼い犬に盛夏の午後になると日陰の土間で4足をおもい切り伸ばして敷物のように腹ばいになって寝る変な奴がいた。

802. 台所と厨房用燃料

インドネシアでは家の構造においても台所は冷遇されている。邸宅では台所は別棟にあり、使用人がそこで料理して本邸の食堂へ運ぶ。インドネシアの食卓では作りたてのアツアツのものは歓迎されないから台所と食堂は離れていてもよかった。そもそも台所は女中の領域であり、女主人といえどやたらと立ち入る場所ではなかった。

庶民の家においても台所には必要最小限の用具しかない。カンブン(→728)では家の外に置いてある木箱が「ダプール(dapur=台所)」といわれる。庶民の台所とは屋外の木箱に入る程度の道具しかない。経済的余裕の問題より食事は家で料理するよりも屋台で買うのがインドネシア人の生活スタイルである。

インドネシア人の食事の風景も各人が都合のよい時間に勝手に食べている。就寝は個人が夫々の生理にしたがって勝手な時間に勝手な場所で寝るのと同じことである

日本やヨーロッパの映画で見ると一つの鍋を取り囲む^{だんらん}団欒の光景は文化として定着していなかった。一緒に食事するのはスラムタン(→705)のような何か特別の儀式にかぎられていた。

そもそも食事は排泄行為と同じく恥ずかしい行為というのがインドネシアの文化の基層にあるように思う。あるいはアジアの共通する文化かもしれない。ただし中国人は例外である。かつて日本でも老婆が汽車の中で隠れるようにして弁当を食べていた光景を思い出す。いい歳の女性が電車の中で平気でアイスクリームを食べるようなことはなかった。

電気、ガス、石油の使用で厨房が大きく変化を遂げた。中流階級以上の家には食堂があり、食事の習慣も西洋風になった。大勢で食べるようになったが、静かに食べている。食事をしながらの会話は無作法という意識があるのでないか。

1998年5月のスハルト大統領が失脚する暴動の要因の一つに石油価格、特に灯油の引上げにあった。電気の普及が十分でないから灯油は文字通り灯り用であるが、もう一つのより重要な灯油の用途は庶民の台所で使う厨房用の燃料である。従って灯油の値上げは食費の値上げと同じことである。

それにしても灯油の値上げがかくまで庶民の怒りに油を注いだのだろうか。そもそもインドネシアは石油生産国である。プルタミナ(→531)を舞台とする石油の利権が為政者の甘い汁になっていることは周知の事実である。

政府当局は補助金で石油価格を安くすることにより庶民を慰撫してきてきた。1998年の政変の引金は石油価格の引上げである。石油補助金の廃止による石油価格引き上げはIMF勧告(→497)であるが、庶民の怒りはIMFでなくスハルト大統領に向かった。

スハルト大統領はIMF勧告に抵抗したが、最後にはIMFに寄り切られた。IMFにスハルト政権を潰す意図があったかどうかは分からないが、インドネシアで灯油価格はセンシティブ・マター(敏感問題という訳語はイマイチ)であることを裏付けた。

803. マンディ/水浴

ヨーロッパから初めて太平洋の島々に来た人々は水浴の好きな民族を発見してその清潔さに感心した。マレー系の民族(→563)の例にもれずインドネシア人は水浴好きである。乞食でも水浴しないと嫌われて貰いが少なくなる。

特に体臭を嫌うので、一日に数回、少なくとも朝と夕方は必ず「マンディ(mandi=水浴)」を行う。風邪をひいていても熱があっても水浴を欠かさないのが彼らの習慣である。熱帯モンスーンの汗ばみやすい気候の下ではマンディは生活必須事項である。

マンディは肌についた汗や汚れを流すのみならず、心のよどみも流し心身ともにリフレッシュする。朝食をとる習慣は定着していないが、朝のマンディを抜く人はいない。インドネシア人のマンディは一日の始めの充電である。また夕方はマンディをすませてから人に会うので、日中の午後に相手のマンディ前に押し掛けるのは、日本で早朝に相手が顔を洗う前に押しかけるのと同じくらい不作法である。

サラリーマンの頃、インドネシアの某大臣が国際線で到着しホテルで休息してから来社して会社のトップに会うスケジュールをセットした。ところが飛行機が遅れて休息の時間が短くなった。しかし大臣は時間がなくなってもマンディの省略はしないので予定は繰り延べになった。約束の時間に遅れるよりマンディをしないことの方が失礼であるというのが彼らの流儀であることをその時に知った。

インドネシア人の家に招かれるとマンディを勧められる。客人にマンディをさせることは接待である。浴室には水甕かめと手桶があるだけである。外国人が窮屈な格好で浴槽と間違えて水甕につかる失敗談をインドネシア人が面白がっている。

水浴といっても素裸になるわけではなくマンディ用の布(kain basah)で体をおおい、その上から水をかける。

水がめをのぞけば金魚が泳いでいることもある。観賞用ペットではなくボウフラ退治の実用である。

庶民のマンディは屋外である。農村の早朝の道を子供連れの家族が歩いている。子供が素裸でふざけており、母親が衣類とポリエチレン製の洗面具を手に入れているのでマンディの帰りであることがわかる。

生活の西欧化にともない最近では中間階級の住宅ではシャワーも普及してきた。ただし冷水であるのは日本人が冷水で顔を洗うのと同じであろう。

世界的に知られている日本人の風呂好きは南方系民族の DNA であろう。気温の低い日本では湯を使うことで快楽を追求するようになり、湯の温度はだんだん熱くなった。一方では神事の前に水垢離^{みずごり}で身を清める。水垢離にマンディの原型があるように思う。日本へもたらされたマンディは宗教儀式と清新慰安に分化したのではなかろうか。

日本へきたインドネシアの留学生が立ち向かう最大のカルチャーショックは“銭湯”である。熱い湯もさることながらそれ以前の問題は裸になることである。イスラム教によれば裸になることは人目がなくても罪である。

804. 便所は水洗

インドネシア語の「カマル・クチル(kamarkecil)」の直訳は「小さな部屋」という意味で要は便所のことである。マンディ室(前項)と兼用が多い。

便所をそのままストレートにいうのは下品である。便所についてどのような言い方をするかは文化の洗練度合いといわれる。日本語も便所については雪隠^{せつちん}、御不浄^{ごふじやう}、後架^{こうか}、手洗い^{てあらい}、手水^{てみづ}、憚り^{はばか}など多くの言葉がある。近頃ではトイレとか WC などもっぱら外国語から借用している。どういわけか中国語は文字発明以来“廁^{かわや}”を墨守している。

まず便所の位置であるが、イスラム教徒の用便の心得はキブラ(→810)に向かってはいけなし、尻を向けてもいけない。あるイスラム教国の工場の設計図を現地でチェックしてもらい、便所の位置に苦労したという日系企業の話聞いた。

インドネシアの庶民の家でカマル・クチルのある家は多くない。そこで「pergi ke sunga 直訳(川へ行く)」とは便所の用足しのことである。川原に小さな穴を掘る。終わった後は土をかけておくのが礼儀である。

川のない都会のカンプン(→728)では共同 MCK である。MCKとは Mandi=水浴、Cuci=洗濯、Kakus=便所のシンカタン(→964)である。手入れの悪い MCK は水苔が付着してコンクリートの床が滑りやすく快適な場所とはいえない。

ジャカルタの運河沿いのガジャマダ通には百メートルの間隔でコンクリート製の仕切がある。公共のマンディ場で、コンクリートの壁は通行人の視野からの遮蔽^{しきへい}である。一般に便所の仕切は下の部分にしかないので始めて遭遇すると何をしているのか分からないが、排泄作業であると気がつく。

朝、バリ島などで海岸を散歩しているとたまたま腰まで海に入っている人を見かけることがある。何の漁かと観察しているとこれもまた排泄作業であることにしばらくして気がつき急いで立ち去る。

用の終わった後は水で流す。タンクに貯めてかなりのバクテリアの作用でかなり無害化にしてから下水に流すことになっているが、実際は現物が川などにプカプカ浮いているのが見える。市内を流れる川が下水道の役目を果たしている。

便所にしろマンディにしろやたらに周りが濡れているので行儀が悪く見えるが、これには訳がある。「流れる

水はきれい」という信条に従い、川であるがごとく水を使うからである。インドネシア人に水道の栓の締め忘れが多いのも同じである。インドネシア人が日本でホームステイする際のトラブルの多くは“水問題”である。

高床式の住宅では川に通じる通路があって便所の下が川という 100%水洗式のものもあるが、外島の僻地で便所の下に豚を飼っているところでは豚が全部清掃してくれる。ついでに用済み後の尻をきれいになめてくれるという。マハカム河(→194)の上の厠での体験者によるとブツが水中に落ちた瞬間に魚が寄ってきて素早く処理するので川には不潔なものは浮かんでいない。川に限らず養魚池でも同じ光景がみられるそうだ。

805. 便所の使用法

インドネシアでインドネシアの便所は和式と同じで屈んで用をする。地面に便器が埋め込んである。日本の金隔しに当たるものがないので前後に迷うが、穴の上に自分の尻がくるように座る。自流式で水圧がないので穴に落とさないと流れない。

便所には紙がなく、水甕か手桶に水があり杓が添えてある。右手の杓で水をくみ、そこから先は左手直営の作業に委ねられる。最近では手桶と杓に代わり水道栓からのホースを見かける。とにかく右手と左手の分業は厳守である。

しゃがむ恰好で左手の作業は前からか後ろからと試してみたがどちらでも水が飛び散る。手の作業は後から手を回す方がやりやすい。下着が濡れるという反論がありそうだが、彼等はズボンも下着も脱いで作業にかかる。そのため中にはフックがある。

公衆便所の扉の上の棧に脱いだ下着を掛けたら外から手を伸ばして泥棒に持って行かれた人がいる。追いかけるにしろ、見逃すにしろ非常に困るので注意が必要である。

インドネシアでは大の方の用の後、紙で拭くという行為は普及していない。外国人が紙で拭くというとインドネシア人は紙では拭き取れないから塗り込めることと同じと解しており、そのような不潔なことを真似するつもりはなさそうだ。

インドネシア人に痔が少ないのは紙を使わないからだという説がある。従ってインドネシアの一般商店ではトイレットペーパーなるものを売っていない。トイレットペーパーは高級スーパーにしかない文明商品である。

外国人でインドネシア式本格的な水洗便所になじめない人はトイレットペーパーを持参せねばならない。この場合、使用済みのペーパーは備え付けの屑入れにいれねばならない。紙をほぐすほどの水勢がないからである。

全工程水洗式はインドなど第三世界での習慣である。仮にもし不衛生であるからと紙の使用を推奨して全人類が用便後に紙を使い出せばパルプの所要量は膨大な数字で地球上の森林資源はたちまち払底するという不気味な話がある。

公衆便所で男性用便器に向かう間にあまりキョロキョロもできないのでいやおう無く前方を注目せざるをえない。発見するのは陶磁器の便器が日本のメーカーのものであることであるが、さらによく観察すると便器の中の臍の位置に小さな蛇口がある。

しばらくして分かったのは男性自身を水洗する装置とのことである。日本人は清潔好きであるが、女性とはにかく男性がいちいち用便後に洗うことはないだろう。この装置はインドネシアだけでなく全イスラム教国にあ

らしい。用後は大小、前後を問わず洗うべしとコーランに書いてあるのかもしれない。

彼らは用後手を洗う習慣はないが、こちらは必ず洗うらしい。立派な衛生陶器はかぎられた所だけであるから、一般には水を汲んでかける。自分が小便をした溜り水を使用していたとの見聞がある。

806. 抱き枕と蚊帳

初めてインドネシアのホテルで過ごす人はベッドに奇妙なものを発見するであろう。枕とは別に長い枕まくらのようなものがある。「バンタル・グリン(bantal guling)」は日本語で“抱き枕”とか“ころがり枕”といわれるものである。

長さ 120～150cm、半径 20cm の細長い筒型で中にパンヤ(pangya)がつめてある。パンヤは種から油を搾油するが、カポック(kapok)または絹綿の樹ともいわれ断熱材として用いられる。パンヤは冷やかであるので暑苦しい夜は抱き枕を腕に抱き、脚をからめて寝る。“Dutchwife”という別名がある。

インドネシアには夜具をかけて寝る習慣がないことから布団代わりに普及した。抱き枕は植民地時代の西欧式ホテルにも採用され、空調のない時代に寝苦しい南国夜を過ごした旅行記に出てくる。空調の普及した昨今のホテルではバンタル・グリンの有り難味はそれほどないにもかかわらず、今日においてホテルの備品となっているのはインドネシアの慣習として定着したものである。

ちなみに大阪千里の民族学博物館では中国・朝鮮の民俗品の竹製の抱き枕が展示してあった。湿気の多いモンスーン・アジアでの発明品であろう。“竹夫人”という俗称がある。

『Daun Di Atas Bantal』邦題名『枕の上の葉』というインドネシア映画はストリート・チルドレンを描いたヒューマニステックな映画である。標題の“枕”は庶民の安穏な幸福、母性、子宮を象徴しているらしく『枕の上の葉』とは枕の上の葉のように吹けば飛ぶような庶民の幸せ、儂はかばかい命のことであろう。

同じトッグカルヤ監督による『蚊帳かまどの中』というインドネシア映画(1992 年)があった。結婚した夫婦が住宅難から女性側の家に同居するが、夫は実父と折り合いが悪く夫は家族の一員になれない。義父のコネで得た仕事を辞めてタクシーの運転手になったことから一族の非難にさらされる。妻は夫と一族の葛藤かっとうに苦しむ家庭劇である。

最も気になったのは映画のタイトルの“蚊帳”である。インドネシア語の映画のタイトルは『Dibalik Kelambu』で『蚊帳の中』は直訳である。インドネシアでは蚊帳は親密な家族の象徴でもあるらしい。

日本語にも“蚊帳の外”という言葉がある。インナーサークルの仕切りとして蚊帳が日本とインドネシアで同じ意味で使用されている。さて蚊帳を見たことのない、且つ個室で一人寝る日本の子供にこのニューワンスが分かるだろうか。

インドネシアでは結婚に蚊帳を新調する。日本では新しい布団が新婚の象徴であるごとく、インドネシアでは新しい蚊帳が新婚の象徴である。

熱帯の伝染病で最も恐れられているのは蚊が媒介するマラリア(次々項)である。都会ではマラリア蚊はいなくなったが、デング熱という蚊が媒介する熱病は健在である。従って蚊帳は必需品である。

807. 屋根の素材

インドネシアのような熱帯での家の絶対必要条件は直射日光と雨を遮るための屋根である。伝統家屋では



トングコナン

屋根と破風は権威の表現であり、信仰でさえある。屋根こそ家の基本であることから屋根だけが特化したのがトラジャのトングコナン(→940)であり、ジャワのジョグロ屋根(→794)であろう。屋根の両端を突出した木で交差した千木は日本の神社建築のシンボルである。何故かスラウェシ島のブギス人(→615)の住宅に千木に似たものがある。屋根装飾の偶然の所産であろうか。

しかし一般には屋根も建造物の一部で実用性と経済性の所産である。高層ビルの窓から見下ろす大都会の民家の屋根はスレートの煉瓦色であり、ヨーロッパの街の外観と似ている。瓦はヨーロッパの移入技術でインドネシアの地場産業になっているが、焼結温度が低いため質はよくない。その上、滝のようなスコールと赤道直下の直射日光にさらされ屋根瓦の損耗が甚だしい。雨漏りは日常茶飯事である。スコールも進行方向で屋根に当たる角度が異なると雨漏りの場所も変化する。

要するにヨーロッパの天候に対応程度の薄い瓦ではスコールと赤道直下の直射日光には耐えられない。家屋の部品で最も弱い個所が屋根である。屋根からの水はけのための樋は日本では腕の太さである所はインドネシアでは太股の太さが必要である。最近の日本の夕立は樋からあふれている。夕立という優雅なものではなくまさにスコールである。

都会は瓦であるが、農村では周辺で調達できる椰子の葉であり、耐久性からニツパ椰子(→045)がよい。竹で編んだ壁の部屋にゴザを引けば、のんびりとしたたたずまいの高床式住居の昼寝は東南アジアの風土に溶け込んだ光景である。

椰子の葉で葺いた屋根は直射日光を避けるのには有効であるが、雨に対しては樹の下の雨宿りと同じで一時的な対応にすぎない。椰子の葉をトタンに置き換えて文明化したら、雨は防げるがトタンは直射日光では焼けるばかりに熱くなり困ったということである。日中は屋外の日陰におり、夜、寝るためだけの家とならざるをえない。

トタンのもう一つ問題は騒音である。スコールの際のトタン屋根の下は太鼓の中に閉じ込められた虫のようなものである。

椰子と比べると波トタンを釘で打ちつけた屋根は軽くて丈夫で重宝である。屋根が軽くなれば屋根を支える柱も儉約できる。スコールもトタンを吹きぬけることは出来ない。工事費も安く実用と経費の面から屋根を考えると波トタンは革命的素材である。

期待して伝統民家を見に行くと、せつかくの民家の屋根がトタンで覆われているということがまある。日本の藁葺の民家の屋根がトタンで覆われるのと同じである。

インドネシアは地震大国である。マグニチュードの大きな数字を見ると被害が心配されるが、大きな地震の割に死者が少ない。外島では人口密度が小さいという事情もあるが、屋根が軽いという家屋の構造もあるだろう。仮に日本のような重い瓦屋根であれば死傷者は増えるであろう。

808. 熱帯病マラリア

熱帯の病気で恐れられているのはマラリアである。マラリアは症状からいくつかのタイプがある。代表的な「3日マラリア」は3日間熱が続く、4日目に熱が下がるが5日目から同じサイクルで繰り返す。「4日マラリア」は4日間熱が続き、1日熱が下がるという発熱と悪寒のサイクルである。マラリアが英語で「blackwater fever (黒水熱)」といわれるのは、感染すると尿が黒くなるためである。

マラリアは高熱が続くので体力が落ちる。3日マラリアは5年間、4日マラリアは20年間も続く。悪質のものは2週間で死にいたる。高熱のため脳障害を起こしがちであり、直っても後遺症が残ることが多い。マラリアの特効薬は今も昔もコナの木から得るキニーネ(→556)だけである。

マラリア原虫を媒介するのはハマダラ蚊のメスである。ちなみにオスは肉食主義であり人畜無害である。有閑氏の観察記によるとハマダラ蚊は垂直に襲ってくるらしい。あつというまに針をさし、その間は数秒という早業という。日本の蚊のように偵察飛行を十分に行ってからおもむろに着地し、吸血の適地を探索してからようやく針で穿つ、というようなのんびりしたものではない。

ハマダラ蚊は水たまりで繁殖⁶するが、きれいな水でなければならない。ジャカルタではハマダラ蚊の繁殖できるようなきれいな水たまりがなくなったからマラリアがなくなったという。

近代医学の発展は対症療法から進んで蚊の発生そのものが防がれるようになった。それには DDT が大きな威力を発揮した。この結果、ジャワ島ではマラリア蚊の存在はあまり聞かれなくなったが、蚊が媒介するデング (dengue) 熱は健在である。

バリ島でもケチャダグス(→915)は夜に屋外の^{かまど} 篝火に照らされて演じられるが、不思議なことに観光客の来る所には蚊はいない。しかし僻地に行くとマラリア蚊は今も健在である。木材関係者が伐採現場へ行く際には蚊取線香は必需品である。獐猛な蚊も線香の煙にふれるやバタバタと面白いように墜落してくるそうだ。

蚊帳とか蚊取線香以外の防蚊道具で珍しいものは蚊取りラケットと音発生器である。蚊取りラケットは電池の電気で感電死させる。蠅退治にも威力を発揮する。取扱は若干の熟練を要する。音発生器は雄蚊の飛ぶ音を流すと雌蚊はいやがって来ないそうだ。

インドネシアに限らず熱帯アジア・アフリカ・中南米の僻地へ行く時の七つ道具を外務省の知人から聞いたことがある。①飲料水(ペットボトル or 缶入りのお茶)、②食料(あられ or クラッカーの類)、③蚊取り線香、④キニーネ、⑤防虫スプレー、⑥下痢止めの薬(例えば正露丸)、⑦懐中電灯である。③④⑤と三品までがマラリア関係である。

現代医学はマラリアを征服したように見える。しかしこのことは同時にもっと大きな破壊を地球にもたらすようになった。なぜならマラリアを畏れなくなった人はジャングルに侵入し、大規模伐採に拍車がかかり熱帯雨林が滅失する誘因となったからである。

⁶戦時中マラリア調査のためにインドネシアに滞在した倉茂好雄著『蘭印滞在記』によればマラリア媒介蚊は半カン(塩水)水や泥水にも繁殖する。養魚池もマラリア蚊はいららしい。